

現地でのつながりから 高知と上海の高校生交流を実現

尾崎 靖司

現在の勤務校等
高知県立高知東高等学校

在外での勤務校／帰国年月
上海日本人学校浦東校／2019年帰国

上海日本人学校在任中に見学した日本語クラスを持つ高校と、高知の県立高校の交流を実現。来日した上海の生徒たちは高知市内の家庭にホームステイし、日本の高校生活を体験。滞在中に国際シンポジウムにも参加した。現在は中国語科のある別の県立高校で中国現地校との交流事業企画を進めている。



実践・活動の内容

● 上海外国語大学附属外国語学校東校と高知県立高知西高校の交流

上海日本人学校（中国）在任中には、学校業務での交流以外にも個人的な伝手をたどって、日本語の授業をおこなっている現地の学校を積極的に見学していた。そのうちの1校である上海外国語大学附属中学東校（日本の高校課程に相当、略称：上外附中東校）は日本語だけでなく様々な言語の学科を持つ名門校で、親しくなった教員から、日本の学校と交流したいという相談を受けた。

上海日本人学校では定期的に現地校と交流しており、そこでは、子どもたちが片言の英語と日本語、そして中国語でお互いに働きかけ、好きなアニメや漫画など共通の話題で仲良くなっていく。その様子を見ながらこれが国際交流だと実感していた。そして、このような交流を地元高知でもいつか実現したいと考えていた。

そこに持ち掛けられた相談だったので、私のほうからも積極的に「高知県の高校はどうか」と提案した。先方も乗り気になったので、学校探しを始めた。

上海赴任中の国内在籍校にまず打診したが、ちょうど統合を控えており無理だった。次に、英語科があり、国際交流に力を入れている県立高知西高校に相談したところ快諾、話が進むことになった。

上外附中東校と高知西高校は姉妹提携を結び、生徒が高知を訪問する計画が順調に進んだ。その途中2019年3月に私は帰任し、別の高校に着任した。しかしこの交流事業にはそのまま関わり、その年の7月に4人の生徒と引率教員を迎えた。一行は4泊5日で高知を訪問し、ホームステイ、学校体験、部活体験などの交流を通して、日本の生活を満喫した。さらに市内のホールを借り切って実施された高知西高校主催の国際シンポジウムにも参加。別の事業で来日していた香港の学校と、西高校の生徒とともに、英語、中国語、日本語の三か国語を駆使してシンポジウムを盛り上げた。

【仕事の品格】

「高知西高校で、交流会や部活動を体験しました！」



高知西高校での交流会のようす

【仕事の品格】

「高知西高生、香港の生徒、上海外国語大学附属中学の生徒と英語でトークセッションを行いました！」



国際シンポジウム トークセッションに参加

● 高知東高校と中国の学校との交流事業

現在勤務している県立高知東高校には中国語科があり、毎週ネイティブスピーカーの教員から指導を受けている。ここでも中国の学校と交流をしたいと考えて、日中友好協会などの人脈から交渉を始めていて、すでにいくつかの話が具体的に進んでいる。安徽省からは、2019年秋に省の訪問団が見学を訪れており、今後の交流事業展開について話し合っている。湖北省黄冈市外国語学校（高校相当）からは、「高校生が日常で使うような、生きた日本語に触れたい」などの要望を受けている。

コロナ禍で当面の直接交流ができない状況になっているが、オンラインではやり取りを続けており、中国語で書いた手紙を送りあったり、コロナ終息を祈る千羽鶴を贈るなどの交流を地道に続けている。2021年には、高知東高校と高知の良さをアピールする動画（日本語／中国語）も作成し、学校ホームページで近日公開予定である。これからも取り組みを広げていきたいと考えている。

■ 高知東高校ホームページ

<https://www.kochinet.ed.jp/higashi-h/>

【仕事の品格】 安徽省訪問団拜訪了东高中 (2019・9・26)

安徽省訪問団
高知東高校を訪問！



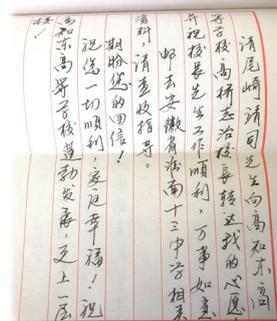
協議する訪問団と本校管理職

高知東高校校長 と 淮南市教育体育局党委書記李局長

安徽省訪問団が本校を訪れ、授業の様子や行内の施設を見学された。その後開かれた懇談会では、本県と安徽省との交流の歴史に触れ、今後本校と安徽省の中学とで交流事業を展開することが話し合われた。

【仕事の品格】 淮南市第十三中学和东高中交流开始了

学生是亲善大使！



知上同業、我輩日本の高知県の 高知市南
高知市南區下志の田岡町に於て、本校校長
尾崎靖司先生の指導により、本校と安徽省
淮南市第十三中学との交流が始まりました。
この交流は、両校の生徒が互いに親善大使
として活躍することを目的としています。
この交流を通じて、両校の生徒が互いに
理解を深め、国際的な視野を養い、将来
の国際社会で活躍する人材を育成する
ことに貢献することを期待しています。

生徒作：初めて中国語で手紙を書く

淮南市第十三中学の陳国武校長先生より

安徽省訪問団の高知東高校訪問、安徽省淮南市第十三中学との手紙交流



評価と課題

【仕事の品格】 「高知と聞いたら、ドキドキします」



私は高知で、今まで経験したことのない感動を得ました。暴風のなか、担任の先生に駅まで送ってもらったこと、みんなで協力して掃除したこと、帯屋町で柚子の味のかき氷を食べたこと、発表会のとき応援してくれたこと、一緒に笑ったこと、最後に泣いたこと、本当に夢みたくない、何よりも忘れられない体験となりました。

「高知」と聞いたら、今でもドキドキしてしまいます。

上海外国語大学附属中学
任伊稼

上外附中東校からの参加者のコメント

上外附中東校の生徒のひとは、高知で経験した学校生活のことを、掃除、かき氷、発表会などと具体例を挙げて「本当に夢みたいな、何よりも忘れられない体験となりました。「高知」と聞いたら、今でもドキドキしてしまいます」と作文に記している。

日中双方の生徒が、交流によってお互いの国のことや地域のことを身近に感じ、もっと交流したいと考えているように感じる。交流事業を一過性のイベントで終わらせるのではなく、課題を共同して解決するようなプランを考えていきたい。

上海在任中に見学訪問した上海市内の高校生・大学生に、アンケート調査をしたところ、彼らの興味の対象は「日本の学校生活」であった。日頃から日本のアニメや漫画に親しんでいるので、学校の部活動や放課後の過ごし方などの日常生活描写にあこがれがあるようだった。それならば高知でも十分に体験できる。地方の学校は、中央から距離があることで国際交流に消極的になりがちだが、そんな必要はないと思った。

予算、所要時間、距離を考えると、中国・韓国等の東アジアは国際交流事業を実施しやすい。赴任先が上海で、現地で人脈を作れたことはとても良かったと感じている。

現在のところ、実際にやったのは「上海の生徒たちを呼んできた」というだけで、取り組みの実績はまだ発展途上だと思っている。



実践に至った経緯と提言

ずっと高校教員として勤務していたので、日本人学校の存在は遠かった。たまたま中高一貫校に勤務したときに募集案内を見て興味を持ち、中学勤務3年以上という条件を満たしてすぐに応募した。当時日本では中国といえばひどい大気汚染や「段ボール肉まん」が話題で、赴任前の印象は正直良くなかった。

上海勤務が決まった時に、地元の日中友好協会を訪問し、現地の人脈を紹介してもらった。赴任してすぐに連絡を取り、自宅マンションのトラブルがあった時に助けてもらったりした。特技の空手の上海支部でボランティア指導員をして「日本から来た先生」として中国人生徒とも親しくなった。日本語教室のボランティアやスピーチ大会の審査員に友情参加したこともある。「どうせ飲むなら地元の人と」と考えて、積極的に友人を増やしていった。現地の人々には、本当に助けられた。文化や言葉、価値観などの違いはあるものの、相手を理解することが国際理解だということを感じることができた。それを生徒たちに伝えたいという気持ちが、現在の活動につながっている。



ボランティアで空手の大会審判

また、上海に高知の教員が行くということの意味を考えた。高知で上海というと、1988年の高知学芸高校修学旅行生の上海列車事故が一番に思い浮かぶ。私自身も、小学生のときに地元高知で連日それを報じるテレビニュースを見ていた。以来、高知と上海の関係には、常に陰が付きまとっている。未来のためにはこのままではよくない。自分は、その不幸な歴史を乗り越えるくらいの熱量を持って赴任しないといけない。しかし、熱意のあまり無神経なことをしたら犠牲者や遺族に対して礼を失することになる。これは、安易な気持ちでは行けないと思った。

さらに、別の面からも「高知」を意識していた。高知には国際学科を持つ学校もあるが、現実には外国人と会うことも少なく、国際交流も異文化交流も実体験しにくい。海外から帰国した生徒の経験が活かされることがないばかりか、授業の未履修部分が問題にされるなど、むしろ海外生活経験がマイナスになってしまうこともある。教員の側も帰国子女に接してきた経験が少ないので、その困り感を把握できない。さらに、在外校勤務を終えて帰国した教員が、現場にうまく適応できないという例も聞いていた。

そんな状況から、自分は高知県から派遣されるのだから高知に還元できる何かを持って帰らないといけないと、赴任前から強く考えていた。いつか、地方の生徒が留学生と触れ合ったり、海外を身近に感じたりすることができるような舞台を用意したいと考えていた。

その思いは、上海日本人学校での現地校交流で、ますます強くなった。生徒たちがイラストや漢字を使ったり、ジェスチャーを交えてコミュニケーションをしたりしている様子を見て、逞しさを実感するとともに、少しの努力でこんなコミュニケーションができるのだと実感した。教育の場で国際交流した経験を持つ子どもたちが大人になったとき、未来を変えることができるのではないかと。そうすることで、国家間の難しい問題の解決の糸口が見えるかもしれないと、本気で思うようになった。

しかし、日本語学校の訪問時にとったアンケートでは、高知はじめ四国4県の知名度の低さに愕然とさせられた。北海道・宮城・東京・京都・高知・徳島・香川・愛媛・福岡・沖縄の名前を挙げて知っている地名に○を付けてもらったが、東京・大阪・京都はともかく、北海道や福岡、沖縄よりも○が少なかった。

アニメ・マンガの影響で、日本の高校生活や部活にあこがれている中国人は多い。それならば地域の知名度は低くても高知でも実現できるので、今後留学先として売り込むことを考えている。そして個人的には「高知にいる尾崎」の姿を、今も滞在中に培ったコミュニティに向けて発信し続けている。

現任校の高知東高には中国語の授業があるが、興味関心程度でとどまっている。身につけた中国語を使って、「中国を旅したい」とか「ビジネスに活かしたい」という生徒はまだいない。また、国際交流や外国人イコール欧米人というステレオタイプのイメージを持っている。まずはこれを覆そうと思っている。



湖北省黄冈市外国語学校と高知東高校とのオンラインミーティング

国同士がうまくいっていないのだから、自分たちが何をしても意味がないと生徒たちはいう。しかし未来をつくっていくのは子どもたちである。友人がいる国とは誰も戦争したくない。だからこそ国際交流をして、外国人とコミュニケーションした記憶を持ってほしいと願っている。そうすればきっと、世界は悪い方向には進まないはずだ。

隣で困っている人がいたら大丈夫？と尋ねるのがあたりまえだ。外国人の場合は言葉が通じないから声をかけられないというのではなくて、同じ人間として手伝えるようになってほしい。言葉はできなくても誰とでもコミュニケーションできるような、度胸のある生徒をつくりたいと思っている。

帰国後は、高知県の国際理解教育研究協議会で活動しており、先輩や仲間たちに良い刺激を受けている。しかし、活動の場は限られている。また、国際交流の会合などに参加するものの、思い出話のほうが多くなってしまっているのが残念だ。

これから在外校に赴任する人に向けて「海外に行く時の心得」などを共有できる場があればよいと思う。世界中に90もある日本人学校にせっき国のお金をかけて派遣されるのだから、そこでつかんだ何かを持って帰って各自の地元でばらまいてほしい。